

[論文]

現代ポーランド語における「*er*型男性名詞」の曲用について

貞包 和寛

0. はじめに —本研究の意義—

現代ポーランド語語彙の中には、語末が *-er* で終わる一定数の語群が存在する¹。詳解辞典や語源辞典を概観すれば、この語群の大部分が借用語の男性名詞から成り、その曲用的特徴によって二つのタイプに分類出来ることが分かるであろう。

I：曲用に際して、*-er* に含まれる *e* が消える、つまり出沒母音のように振舞うもの（例：*magister* [SG, NOM]「修士」>*magistra* [SG, GEN]）。

II：曲用に際して、*-er* に含まれる *e* が消えずに残るもの（例：*reżyser* [SG, NOM]「監督」>*reżysera* [SG, GEN]）。

語末の構成が同じ（すなわち *-er* 終わり）語群において、その曲用タイプが語彙的に異なるのは何故だろうか。上記の *magister* と *reżyser* のように、語末の構成が同じであっても（この場合は *-er*）であっても曲用タイプが異なる例は幾つもある。また、借用元を同じくする語であっても、曲用タイプが異なる場合も多々ある。例えば *koliber*「ハチドリ」と *kaskader*「スタントマン」はどちらもフランス語からの借用語であるが、語形変化は前者が I 型 (*kolibra* [SG, GEN])、後者が II 型 (*kaskadera* [SG, GEN]) に属す。これらの点を考慮すると、上の問いに対する答えは容易には出せず、言語学的な考察が要求されるであろう。

従って筆者は、拙論の目的を以下の二つに設定する。

1. *-er* 終わりの借用語の名詞が曲用タイプを選択する際に、どのような傾向が見出せるかを分析する。
2. 上記 1 で観察される傾向はいかなる要因に拠るものかを明らかにする。

以上の2点である。これらの目的を達成するために、拙論は以下のような章立てを取っている。

まず第1章では、具体的な分析に先立ち、拙論において頻出する二つの用語、「借用」と「語源」使い分けについて簡潔に述べる。続く第2章では、拙論で検討する語彙を詳解辞典から抽出する作業を行う。また、この作業に基づいて「*er*型男性名詞」を明確に定義する。第3章から第6章では、抽出された「*er*型男性名詞」を借用元、曲用タイプ、頻度の観点から分析する。第7章では、これまでの分析の結果見いだされた傾向の要因として「借用語の「主格保持」の機能」を取り上げる。第8章は全体

の結論と今後の研究課題である。

1. 拙論における「借用」と「語源」の使い分け

具体的な語彙の収集、分析に先立ち、拙論における「借用」と「語源」の使い分けについて、予め明示しておく。使い分けの原則は以下の通りである。

借用：何れの言語から借用されたか。

語源：借用元の言語においてはどのような形態で現れるか。

pasazer「乗客」を例に説明する。この語は、*Uniwersalny słownik języka polskiego* (『ポーランド語普遍辞典』以下 USJP) の解釈に拠ると、フランス語の *passager*「乗客」からの借用語である。従って、*pasazer* の「借用」元はフランス語であり、その「語源」は *passager* となる。

さらに拙論では、上記 2 語と並行して、「由来」という表現を用いている。これは、「～語を借用元とする」あるいは「～語から借用された」と同義に考えていただきたい。文章の展開上、「借用」を用いてあまりに冗長になるような時は、「由来」を用いている。

2. 検討する語彙の収集および「er 型男性名詞」の定義

まず USJP の逆引き目録を用いて、語末が *-er* で終わり、かつ曲用する名詞を収集する²。なぜ対象語彙の抽出に USJP を用いるのかというと、同辞典が現代ポーランド語語彙を扱う辞書の中で最大規模のものであり、語彙の収集には最適であると考えられるからである。逆引き目録による検索の結果、*-er* で終わる見出語は 623 語であると判明した。これらの語は、借用元の言語に於いても「語幹 + 接尾辞 *-er*³」の構成が容易に観察出来る語が多いが(例：*rekorder*「レコーダー」< en. *record-er*)、その構成を観察出来ない語も相当数見受けられる(例：*polimer*「重合体」< en. *poly-mer*)。しかしながら拙論では、語の曲用に注目して論を進める都合上、語末の構成(すなわち、語末が *-er* で終わるか否か)にのみ注目して語彙をリストアップした。さらに、これら 623 語を以下の 2.1 から 2.4 までの諸条件を考慮して絞り込むこととする。順に見ていこう。

2.1. スラヴ諸語に由来する、あるいはポーランド語に固有とされている語

各種辞典の記述から、スラヴ諸語のいずれかに由来する、あるいはポーランド語固有であることが明白な語彙は、*-er* 終わりの構成を持っていても拙論の考察対象から除外した。というのも、語源的にスラヴ諸語に起因しない母音 *e* が出没母音のように振舞う点に筆者は注目しているので、本来的にポーランド語、スラヴ諸語(あるいはそれらの諸方言)の語彙に属するならば、考察対象から外すことが出来ると考えられるからである。

何を以って「スラヴ的」「ポーランド語的」語彙とするかは重要な問題であるが、それは拙論のテーマを超えた研究と成り得る。そこで拙論では、語源辞典および借用語辞典において、「固有 (pl. rodzimy)」「スラヴ一般 (pl. ogólnosłowiański)」およびそれに類する表現で説明されている語を拾い上げた。本章の作業に際して、USJP に加え以下の3冊の辞典を参照した。

Wielki słownik etymologicznohistoryczny języka polskiego (『ポーランド語語源史大辞典』以下 WSEH)

Wielki słownik wyrazów obcych (『借用語大辞典』以下 WSWO)

Słownik etymologiczny języka polskiego (『ポーランド語語源辞典』以下 SEJP)

この条件に当てはまるのは、例えば以下のような語である。

antybohater 「アンチヒーロー」

bohater 「英雄、主人公」

ceber 「(取手付きの) 桶」

jaskier 「キンボウゲ」

kuper 「(鳥の) 背尾部」

ser 「チーズ」

świder 「錐」

żer 「獲物」

ここで筆者は、拙論における「スラヴ本来的な *-er* 終わりの語彙」について纏めたい。というのも、拙論の主テーマが「*-er* 終わりの借用語の語形変化」にある以上、その対極にある「スラヴ本来的な *-er* 終わりの語彙」を論じることで、「借用語」の性質も明らかになるものと考えからである。

これらの「スラヴ本来的な *-er* 型の語彙」も、「借用語の *-er* 型の語彙」と同じく、その語形変化に応じて二通りに分けられる。すなわち、語形変化において *-er* に含まれる *e* が消えるタイプ (例: *ceber* > *cebra*, *jaskier* > *jaskra*, *kuper* > *kupra*, *świder* > *świdra* など) と、*-er* に含まれる *e* が消えずに残るタイプ (例: (*anty*)*bohater* > (*anty*)*bohatera*, *ser* > *sera*, *żer* > *żeru*) である⁴。上記の辞典等を概観する限り、前者のタイプに含まれる母音 *e* は、イェルと関連付けられるか、音の脱落によって得られたこと、逆に後者のタイプに含まれる *e* は、本来的に *e* と異なる母音から変化したことが分かる⁵。

何れにしても、「スラヴ本来的な *-er* 型の語彙」の一定数が、出母音 *e* を伴うパラダイムを成す。さらに、*-er* 終わりの語彙以外でも、*sen* [SG, NOM] 「眠り」 > *snu* [SG, GEN] のように、出母音 *e* を伴う語群が存在することも鑑みると、*-er* 終わりの借用語の一部が、出母音 *e* を伴う変化の類推を被っているものとも推察できるだろう。

2.2. ロシア語を借用元とする *-er* 終わりの名詞

ロシア語を借用元とする五つの名詞は、取扱いに注意を要する。以下に列挙する。

kombajner 「コンバイン操縦者」

komiwojażer 「セールスマン」

lagier 「強制収容所」

rekieter 「強請り」

szaber 「砂利」

このうち、*kombajner* から *rekieter* までの4語は、非スラヴ諸語からの借用が確認出来るので、考察の対象とした⁶。参考までに、これら4語の語源を紹介する。

kombajner < *комбайнер* (en. *combine* 「コンバイン」)

komiwojażer < *коммивояжёр* (fr. *commis voyageur* 「セールスマン」)

lagier < *лагер* (de. *Lager* 「強制収容所」)

rekieter < *рэкетер* (en. *racketeer* 「不正取引を行う者」)

комбайнер に見られるように、ロシア語造語論における *-ep/-er* の生産性についても別個の研究を要するだろう。だがいずれにしても現時点では、これら4語が非スラヴ諸語に由来することは語源辞典の記述から明白であり、音配列の観点から考えても、借用語の意識が比較的高いことが予想される。よって、拙論の考察対象としても問題は無いであろう。一方、*szaber* については、USJP においてロシア語の方言と記述されているので、対象から外すこととする。

2.3. 生産的な *-er* を持つ名詞

次の A と B に挙げられる 11 語も、扱いに注意を要する。というのもこれらの名詞は、ポーランド語の造語力が独自に生産した可能性が否定出来ないからである。

A. 本来的なポーランド語の語彙 + *-er*

koser 「園芸用ナイフ」

kosynier 「大鎌農民兵」

pomagier 「助っ人」

uciekinier 「脱走者」

形態的・意味的観点から見ると、*koser* と *kosynier* は *kosa* 「鎌」との関連を予想させる⁷。同じく *pomagier* < *pomagać* 「助ける」+ *-er*、*uciekinier* < *uciec* 「逃げる」+ *-er* の語構成が観察出来る。*kosa*、*pomagać*、*uciec* はいずれも本来的なポーランド語、あるいはスラヴ的語彙であり、これらに *-er* を接尾辞的に付して「行為者」「道具」の意味を持つ新語を形成している。

B. 他言語からの借用語 + *-er*

aporter 「獲物を持って来る猟犬」

multiplekser 「多重放送」
paker 「圧縮プログラム」「筋トレマニア」
politykier 「政治屋」
praser 「プレス機操縦者」
prognozer 「予報士」
tekster 「コピーライター」

B に属する語彙は、「借用語 + *-er*」という語構成からなる点で、上記 A と異なる。形態的・意味的観点から見ると、以下のような構成が観察される。

aporter < *aport* 「(狩猟用語) 持って来い」(de. *apport*⁸ 「持って来い」) + *-er*
multiplekser < *multipleks* 「多重放送」(la. *multiplex*) + *-er*
paker < *pakować* 「詰める」(de. *packen* 「詰める」) + *-er*⁹
politykier < *polityka* 「政治」(gr. *πολιτικά* 「政治」) + *-er*
praser < *prasa* 「プレス機」(de. *Presse*, fr. *presse* 「プレス機」) + *-er*
prognozer < *prognoza* 「予報」(fr. *prognose*¹⁰ 「予想」) + *-er*
tekster < *tekst* 「テキスト」(en. *text* 「テキスト」) + *-er*

これら 7 語に共通する特徴は、借用元の言語において *-er* の付いた語が存在しないという点にある。例えばポーランド語の *tekst* は、英語の *text* を語源とするが、拙論で参照した英和辞典および英英辞典¹¹には **texter* という語は収録されていない。残りの 6 語に関しても同様のことが言えるので、B に属する語はポーランド語の中で独自に生産された可能性が高い。

それでは、これら A と B の 11 語に関しては、どこに借用元を辿るべきであろうか。それを判断するためには、ポーランド語学における *-er* の取扱いと、その生産性を考慮する必要がある。「0. はじめに」で述べたように、ポーランド語の語彙の中で語末が *-er* で終わる名詞は、その多くが英語、ドイツ語、フランス語、などにおいて *-er* で終わる語からの借用である。英語の *teach-er* などの例を見れば分かるように、借用元の言語における *-er* は、動詞や名詞に付与されて「行為者」「道具」を意味する名詞を生産することが出来るので、造語フォルマントとして扱ってよいだろう¹²。

ところが、ポーランド語学の形態論、造語論に関する研究の多くは、*-er* を造語フォルマントとして扱っていない¹³。この要因としては、ポーランド語における *-er* が造語フォルマントとしてではなく「語の一部」としてのみ認識されている、つまり造語要素ではなく語幹の一部と見なされているから、と推測できるだろう。

しかしながら実際には、このような認識を覆す例が見られる。本節はじめに挙げた *koszynier* をはじめとする 11 語はそれに該当するものであり、ポーランド語における *-er* の生産性を部分的に証明している。また Sękowska は自身の論文¹⁴の中で *-er* を接尾辞として扱っており、近年のポーランド語で *-er* が新語を生産する例を紹介し

ている¹⁵。Sękowska は例として、*platformer*「市民プラットフォーム党 (pl. Platforma Obywatelska) の支持者」と言う語を挙げている。*platforma*「プラットフォーム」という語自体は、フランス語の *plate-forme*「プラットフォーム」の借用語である。しかしながら、*-er* を伴う *platformer* は、「市民プラットフォーム党」という言語外現実と結び付いて、ポーランド語造語論の中で独自に生産された新語である。このような語は実例が少ないとは言え、既にある程度の生産性が確認され、かつ *-er* を「接尾辞」として扱っている研究がある以上、部分的には造語フォルマントとしての働きをもっているものと考えられる。

従って筆者は、*-er* を伴う語が造語的・意味的に「独立の語 + *-er*」と分析できる時は、*-er* を造語フォルマントと見なす立場を取ることにした。この条件を踏まえると、上で挙げた 11 語は造語フォルマントとしての *-er* を備えており、ポーランド語の中で生産された語であると見なされる。よって上記 11 語は本来的な語彙と同等と見なし、検討対象から外した。

2.4. 借用元あるいは語源が確定出来ない語

USJP, WSEH, WSWO, SEJP の記述からは借用元あるいは語源を確定出来ない語が幾つか残る。これらの語の中には、例えば *starowier*「ロシア旧教徒」のように、スラヴ諸語的な要素を予想させ、そもそも借用語であるか否かの判断が難しい語も存在する。拙論では、借用語に含まれる *-er* のみを抽出するためにこれらの語は全て対象外として、研究材料の均質化を図っている。

2.5. 「*er*型男性名詞」の定義

以上の作業の結果、拙論で考察の対象となるのは、以下の三つの条件を全て満たす語のみとなった。

1. 語末が *-er* で終わる。
2. 曲用する。
3. 諸辞典の記述から、非スラヴ諸語からの借用語であることが判明している。

これにより、対象となる語の数は 623 語から 564 語に絞られた。また、この 564 語は結果的に、全て男性名詞であることが判明した。以下拙論では、この語群を「*er*型男性名詞」と呼ぶこととする。

3. 借用元による分類

本章では、第 1 章で絞り込んだ語彙を、借用元の言語に基いて整理する。なお、*er*型男性名詞の分類に際しては、借用元の重複に留意する必要がある。例えば *oficer*「将校」はドイツ語の *Offizier* とフランス語の *officer* が語源とされている。このような場合、

oficer はドイツ語の借用語であると同時にフランス語からの借用語でもあると言えるので、数え上げる際にはどちらにもカウントした。今後拙論で提示する表のうち、個々の数の和と全体の総数（564 語）とが一致しない場合があるのはそのためである。

借用元による分類の内訳は以下に示した。「その他」には、全体に占める数が 10 語に満たないものを全て含めている。割合の算出に伴い、小数点第 2 位以下は切り捨てた。

表 1：借用元に基づく分類の内訳

借用元	総数	割合
英語	<i>designer</i> 「デザイナー」など 200 語	34.3 %
フランス語	<i>koliber</i> 「ハチドリ」など 164 語	28.1 %
ドイツ語	<i>cukier</i> など 148 語	25.3%
ラテン語	<i>renifer</i> 「トナカイ」など 27 語	4.6 %
ギリシア語	<i>kateter</i> 「カテーテル」など 19 語	3.2 %
その他	<i>polder</i> 「ポルダー」など 26 語	4.4 %

以上の結果から、ポーランド語の *er* 型男性名詞の大部分は英語、フランス語、ドイツ語の借用語から構成されていることが、数値の上で明らかになった。筆者の予想に反し、ラテン語に由来する語は少数であった。以下、借用元の言語ごとにどのような語があるのかを確認するために、各語群から無作為に選んだ語を幾つか、例として挙げて行く。なお、借用元の言語とポーランド語において著しい意味の変化が見られない場合、借用元における意味は省略する。例えば、ポーランド語の *komputer* は英語の *computer* から借用されているが、意味はどちらも「コンピュータ」である。この場合は、借用元における意味の方を割愛した（例：*komputer* 「コンピュータ」 < *computer*）。また、上で述べたような借用元の重複が見られる場合、両方の語源を記述した（例：*oficer* 「将校」 < de. *Offizier*, fr. *officier*）。

英語由来：

absorber 「吸収材」 < *absorber*

blezer 「ブレザー」 < *blazer*

eye-liner 「アイライナー」 < *eye liner*

globtroter 「世界を旅行する人」 < *globetrotter*

haker 「ハッカー」 < *hacker*

komputer 「コンピュータ」 < *computer*

lider 「リーダー」 < *leader*

menedżer 「マネージャー」 < *manager*
skaner 「スキヤナ」 < *scanner*
tuner 「チューナー」 < *tuner*

フランス語由来：

ankieter 「アンケート調査者」 < *enquêteur*
aromatyzer 「アロマタイザー」 < *aromatiseur*
cylinder 「シルクハット」 < de. *Zylinder*, fr. *cylinder*, la. *cylindrus*
deser 「デザート」 < *dessert*
ekler 「エクレア」 < *éclair*
helikopter 「ヘリコプター」 < *hélicoptère*
kaloryfer 「セントラルヒーティング」 < de. *Kalorifer*, fr. *calorifère*
koliber 「ハチドリ」 < *colibri*
maruder 「略奪兵」「時間にルーズな人」 < *maraudeur*
pasażer 「乗客」 < *passager*

ドイツ語由来：

alzheimer 「アルツハイマー病」 < *Alzheimer*
cukier 「砂糖」 < *Zucker*
filister 「小市民」 < *Philister*
gastarbeiter 「出稼ぎ労働者」 < *Gastarbeiter*
junkier 「ユンカー」 < *Junker*
kelner 「給仕」 < *Kellner*
lagier 「強制収容所」 < *Lager*
macher 「専門家」 < *Macher*
szwagier 「義兄弟」 < *Schwager*
tryper 「淋病」 < *Tripper*

ラテン語由来：

arbiter 「大家」「審判」 < *arbiter*
cerber 「ケルベロス」 < *Cerberus*, -os
charakter 「性格」 < la. *character*, gr. *χαρακτηρ*
karcer 「独房」 < *carcer*
magister 「修士」 < *magister* 「教師」
numer 「番号」 < la. *numerus* 「数」、de. *Nummer*

pauper 「貧乏人」 < *pauper* 「貧しい」
paternoster 「叱責」 < *pater noster* 「我が父」
renifer 「トナカイ」 < *rengifer*

ギリシア語由来あるいはギリシア語に語源を持つと思われる語：

amfimacer 「(韻律) 長短長格」 < *αμφιμακρος*
kateter 「カテーテル」 < *καθετηρ* 「挿入物」
krater 「クレーター」 < *κρατηρ* 「ボウル」
majcher 「大バサミ」 < *μαχαира* 「大型ナイフ」
monaster 「(正教会) 修道院」 < *μοναστηριος*
ornitopter 「鳥形飛行機」 < *ορνις* 「鳥」 + *πτερον* 「羽」

ギリシア語から直接借用されたのか否か疑わしいものも見受けられる。拙論で参照した諸辞典はこれらの語を、ギリシア語からの借用として、例えばドイツ語やフランス語から借用された名詞などと同様の方法で記述しているため、筆者もこれに従うが、例えば *kateter* などは、意味や音を考慮すれば、ドイツ語の *Katheter* を経由した借用語ではないかとも推測できる。すなわち、ここに属する語の「語源」は確かにギリシア語にあるだろうが、その「借用」元については些か考慮の余地があると言えよう。従ってこの箇所は、いささか冗長ではあるが、「ギリシア語由来あるいはギリシア語に語源を持つと思われる語」と表現した。

その他：

Afrykaner 「南アに入植した白人」 < nl. *Afrikaner*
filler 「(ハンガリーの通貨単位) フィッレール」 < hu. *filler*
gondolier 「ゴンドラの漕ぎ手」 < it. *gondolier*
komiwojażer 「セールスマン」 < ru. *коммивояжёр*
rancier 「(南米の) 牧場主」 < es. *ranchero*

4. 曲用タイプによる分類

次に、拙論の主眼である *er* 型男性名詞の曲用に関して、USJP の記述を見ていく。念のため、「0. はじめに」で挙げた分類を再確認しよう。

I：曲用に際して、*-er* に含まれる *e* が消える、つまり出沒母音のように振舞うもの (例：*magister* [SG, NOM] 「修士」 > *magistra* [SG, GEN])。

II：曲用に際して、*-er* に含まれる *e* が消えずに残るもの (*reżyser* [SG, NOM] 「監督」 > *reżysera* [SG, GEN])。

数え上げの結果は、以下の表2に反映されている。なお、タイプIとIIの間に揺れが見られるものが8語見つかった。これらは、本稿では「揺れ」として示している。

表2：曲用タイプに基づく分類の内訳

タイプ	総数	割合
I	89	16.1%
II	468	82.6%
揺れ	8	1.3%

曲用タイプによる分類は今後も非常に重要な要素となってくるので、以下の拙論では強調のため、【タイプI】【タイプII】【揺れ】として表記することとする。

表の「総数」欄を全て足すと565語となるが、これは英語由来の *Ulster* が意味に応じて異なった語形変化に属するためである。*Ulster* が「(地名) アルスター」を意味する時は【タイプII】、「アルスター産の生地」を意味する時は【揺れ】に属する。よって *Ulster* は1語で2度数えられることとなり、総数(564語)と一致しない¹⁶。

以上の数え上げの結果、*er*型男性名詞の実に8割が【タイプII】、つまり語形変化に際して *-er* に含まれる *e* が消えずに残ることが判明した。

5. 借用元と曲用タイプの間に見られる相関

本章では、「3. 借用元による分類」と「4. 曲用タイプによる分類」の擦り合わせを行う。つまり、曲用の3分類のそれぞれにおける、借用元の内訳を概観する。この作業によって、語形変化タイプと借用元の間には何らかの相関関係があるか、あるとすればどのようなものか明らかになるであろう。

表3：【タイプI】における、借用元の内訳

借用元	総数	割合
英語	<i>flamaster</i> 「マーカー」など14語	15.7%
フランス語	<i>pilaster</i> 「壁付き柱」など13語	14.6%
ドイツ語	<i>alabaster</i> 「アラバスター」など53語	59.5%
ラテン語	<i>magister</i> 「修士」など9語	10.1%
ギリシア語	<i>majcher</i> 「大バサミ」など2語	2.2%
その他	<i>mamer</i> 「牢獄」など3語	3.3%

表4：【タイプⅡ】における、借用元の内訳

借用元	総数	割合
英語	<i>adapter</i> 「アダプター」など 182 語	38.8 %
フランス語	<i>helikopter</i> 「ヘリコプター」など 151 語	32.2 %
ドイツ語	<i>kelner</i> 「給仕」など 94 語	20.0 %
ラテン語	<i>carcer</i> 「独房」など 17 語	3.6 %
ギリシア語	<i>monaster</i> 「修道院」など 16 語	3.4 %
その他	<i>kawaler</i> 「独身男性」など 22 語	4.7 %

表5：【揺れ】における借用元の内訳

語源	総数	割合
英語	<i>kliper</i> 「快速帆船」など 4 語	50.0 %
ドイツ語	<i>kipier</i> 「食材管理人」のみ	12.5 %
ラテン語	<i>prezbiter</i> 「司祭」のみ	12.5 %
ギリシア語	<i>archiprezbiter</i> 「古参の聖堂参事会員」のみ	12.5 %
その他	<i>harmider</i> 「喧噪」のみ	12.5 %

【タイプⅠ】中に占めるドイツ語由来の語の多さは注目に値する。【タイプⅠ】に属する男性名詞のうち、実に6割近くをドイツ語由来の名詞が占めているからである。また、ドイツ語由来の *er* 型男性名詞全体（148 語）のうち、35.8 % に当たる 53 語が【タイプⅠ】に属する。英語由来、フランス語由来の *er* 型男性名詞全体で、【タイプⅠ】に属する割合がそれぞれ 7.0 % と 7.9 % であることを考えると、この割合の高さも特筆すべきである。

本章における分析で、ドイツ語由来の *er* 型男性名詞は、他の言語に由来するそれとは異なる傾向を示すことが判明した。英語やフランス語に由来する語の殆どが【タイプⅡ】、すなわち語形変化に際して語末の *-er* がそのまま保存されるのに対し、ドイツ語由来の *er* 型男性名詞は、【タイプⅠ】に属する語の割合が比較的高い。

6. コーパスによる検証

本章では、コーパスを用いた *er* 型男性名詞の頻度の調査を行う。この検証によって、*er* 型男性名詞の頻度と曲用タイプの間にもどのような相関関係が現れるか、または現れないのかが明らかになるであろう。

それに先立ち、今回使用した *Korpus Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN* について解説したい。本コーパスは、学術関連の書籍を中心に扱うポーランドの大手出版社 *Wydawnictwo Naukowe PWN* がインターネット上で無料公開しているも

のである。「デモンストレーション版 (pl. wersja demonstracyjna)」と「完全版 (pl. pełny korpus)」の二つのバージョンがあるが、拙論では前者を使用した。wersja demonstracyjna は以下のように構成されている。

表6：コーパスを構成する素材のジャンル

	比率 (%)
文学作品	14
文学作品以外	28
報道	39
会話	10
チラシ、ポスター、取扱説明書など	9

表7：「文学作品以外」と「報道」の内訳

	比率 (%)
哲学・宗教	7
歴史・地理 (回想録含む)	12
文学評論・言語学 (エッセイ含む)	8
数学・自然科学	9
政治・経済	11
社会科学	8
応用科学	11
芸術	9
レクリエーション・その他	19
日刊紙	6

表8：コーパスを構成する素材の年代

年代	比率 (%)
1920-1945	3
1946-1969	12
1970-1989	23
1999-2000	62

作業の結果は下記、表9のように纏められる。

表9：コーパス上における各語群の出現数

借用元	出現数	【タイプⅠ】	【タイプⅡ】	【揺れ】
英語 (200 語)	5319	79 (1.4 %)	5227 (98.2 %)	13 (0.2 %)
フランス語 (164 語)	13268	5943 (44.7 %)	7325 (55.2 %)	—
ドイツ語 (148 語)	11618	6487 (55.8 %)	5126 (44.1 %)	5 (0.04 %)
ラテン語 (27 語)	5327	275 (5.1 %)	5052 (94.8 %)	0 (0.0 %)
ギリシア語 (19 語)	2053	1 (0.04 %)	2052 (99.9 %)	0 (0.0 %)
その他 (26 語)	213	37 (17.3 %)	171 (80.2 %)	6 (2.8 %)

フランス語およびドイツ語から借用された *er* 型男性名詞は、頻度の点で圧倒的であり、この語群全体の中心的な存在であることが分かる。英語を借用元とする *er* 型男性名詞は、筆者の予想に反して、それ程の数は得られなかった。

7. 借用語における「主格保持」の機能

前章までの分析により、*er* 型男性名詞をその借用元に基いて分類すると、曲用タイプとコーパス上の頻度に大きな特徴が見られることが判明した。具体的には以下の2点である。

1. ドイツ語由来の *er* 型男性名詞は、【タイプⅠ】に属する割合が、他の語群に比して高い。
2. フランス語、ドイツ語由来の *er* 型男性名詞で【タイプⅠ】に属するものは、その頻度の高さがコーパス上で確認出来る。

これらの結果を踏まえて本章では、このような特徴の要因について考察していきたい。

er 型男性名詞は、曲用的特徴によって大きく【タイプⅠ】と【タイプⅡ】の二つに分類出来ることは再三述べてきた。後者については、単数主格形にそのまま語尾が付くタイプの曲用なので、特に説明の要は無いであろう。問題は、【タイプⅠ】に属する名詞が、あたかもスラヴ諸語の出没母音を持つかの如く振舞う点にある。上述の通り、*er* 型男性名詞は非スラヴ諸語からの借用語であるから、スラヴ語的な出没母音を持つ筈は無い。このような屈折論的差異の要因は、拙論 2.1. で述べたように、本来的なスラヴの語彙に含まれる出没母音 *e* との類推に求めることもできるかも知れない。しかし筆者の見所、今ひとつ別の要因も関与しているように思われる。それは、借用語の曲用に際して観察される「主格保持」の機能である。この機能は、端的に言

えば、借用語の曲用に際して元の形態（単数主格形）を維持するために、音交替などを避けようとする働きを指す。以下、先行研究を概観しながらこの機能について詳述する。

ポーランドの言語学者 Rospond は、*-er* で終わる非ポーランド姓について述べている¹⁷。もし当該の姓がポーランド語に十分に浸透している場合、曲用に際して *e* が消える（例：*Luter* [SG, NOM] - *Lutra* [SG, GEN]）。逆に、当該の姓がポーランド語にそれほど浸透していない場合、*e* が消えずに残る（例：*Schiller* [SG, NOM] - *Schillera* [SG, GEN]）¹⁸。また、*Bartmińska* らも、英語姓 *Russell* やノルウェー姓 *Bojer* を例に挙げて、同様の現象を説明している¹⁹。それに拠れば、*Russella, Bojera* [SG, GEN] のような *e* の残る形態は、*Russla, Bojra* [SG, GEN] のような *e* の消える形態と比して、単数主格形の「予測性」がより強く示されると言う。すなわち、*Russell* や *Bojer* という姓がポーランド語に浸透していないため、曲用に際して単数主格形をできるだけ保持しようとする傾向が現れている、とも換言できるであろう。

er 型男性名詞もまた、*Luter, Schiller, Russell, Bojer* などと同じく、ポーランド語以外の言語にその語源が遡れる以上、Rospond や *Bartmińska* らの指摘が当てはまることが予想される。実際に筆者は、『現代ポーランド語における男性人間名詞の複数主格形語尾について』²⁰と題した論文で、普通名詞を素材に同様の現象を発見した。この論文において筆者が注目したのは、ポーランド語の男性人間名詞のうちで複数主格形語尾 (*-i, -e, -owie*) の選択に揺れが観察されるものである。コーパスに拠る検証の結果、「1. 借用性が強く意識される語」「2. 一音節語」のいずれか、あるいは両方の条件を満たしている名詞は、語尾 *-owie* を取る傾向が強いという事実を発見した。例えば *mag*「魔術師」という語は、借用語辞典に収録されている一音節の男性名詞である。この語の複数主格形は *magowie* と、*g/dz* の音交替を伴う **madzy* の二つが予想されるが、後者は誤用である旨が規範辞典に明記されている。この要因に関して筆者は、借用性の強い語は他の形態との相関性を保つために、単数主格の形態を保持しようとするのではないかと結論づけた²¹。上の *mag* の例で言えば、語幹末の *g* 音が *dz* 音に交替すると、単数主格形 *mag* との関連が予測し難くなるのである。

これらの指摘を踏まえて考えると、ポーランド語語彙の中で借用性が比較的強く意識される語は、曲用に際して単数主格形を維持する傾向があると言えそうである。無論、音配列が形態の選択に影響を及ぼす場合もあるだろうが、しかし本章で指摘する「主格保持」の機能は、所与の借用語がポーランド語にどれだけ浸透しているかを測る一つの基準になり得るものと思われる。すなわち【タイプⅠ】（単数主格形を維持しないタイプ）に属する語は、曲用の「ポーランド語化」が比較的進行している語であり、逆に【タイプⅡ】（単数主格形を維持するタイプ）に属する語は、借用語としての意識が割合に高い語であると見なされよう。

以上を前提に表2（語形変化タイプに基づく分類の内訳）を振り返ると、*er*型男性名詞の殆どが借用性を強く持っていることが確認出来るであろう。また、前章においてフランス語、ドイツ語を借用元とする*er*型男性名詞のうち【タイプI】に属する語は比較的頻度が高いことを確認した。これは、【タイプI】に属する語が比較的浸透しているが故に頻度も高くなるから、と理由づけることができるだろう。

8. 結論および今後の研究課題

これまでの作業および分析の結果、筆者は三つの結論を得た。以下に列挙する。

一つ目は、ドイツ語由来の*er*型男性名詞の、数的分布における特殊性である。コーパス上では一般的に、【揺れ】 < 【タイプI】 < 【タイプII】という数的な傾向が指摘できる。この点は、*er*型男性名の大部分が【タイプII】に属することを第4章で確認していたので、ある程度は予想できる結果である。ところが、ドイツ語由来の*er*型男性名詞はこの傾向に従わない。表6に示されているように、この名詞群は【タイプI】の出現数が【タイプII】の出現数を上回っている唯一の語群である。

二つ目は、フランス語およびドイツ語由来の*er*型男性名詞の、曲用タイプ間の比率における特殊性である。表9（コーパス上における各語群の出現数）において曲用タイプごとの出現頻度を比較すると、【タイプII】が残る二つのタイプを圧倒していることが多い。その中で、フランス語およびドイツ語由来の語群は、【タイプI】と【タイプII】の出現頻度が比較的拮抗している。表3と表4から分かるように、フランス語由来の語群は【タイプI】：【タイプII】 = 13語：151語、同じくドイツ語由来の語群は55語：92語である。語彙数としては【タイプI】が少数派であるにも関わらず頻度が拮抗している。ゆえに、フランス語およびドイツ語から借用され、かつ【タイプI】に属する*er*型男性名詞は、平均的によく用いられていると言えるだろう。

三つ目は、英語由来の*er*型男性名詞の頻度の低さである。この語群は、数の上では200語と第1位を占めている。これは、*Wielki słownik poprawnej polszczyzny*（『ポーランド語規範辞典』）などが指摘する所の、英語由来の語彙・表現（いわゆる *anglicyzm*）が近年とみに増加していることを連想させるものである。しかしながら、数的には7倍の差があるラテン語由来の*er*型男性名詞とそれほど変わらない出現数であることから、語彙数に対して頻度自体は低い。また、【揺れ】に属する語の数が比較的多いことも、ポーランド語語彙全体におけるこの語群の「新しさ」を示しているように思われる。

最後に、全体の結論を述べる。前章で述べた「主格保持」機能と語彙の定着度の間には、少なくとも*er*型男性名詞に限って言えば、ある程度の相関が見られると言えよう。というのも、*er*型男性名詞において中心的な存在である英語、フランス語、ドイツ語由来の語群のうち、二つの語群（即ち、フランス語およびドイツ語由来）で

【タイプ I】(すなわち、定着度が高いと予想されるタイプ) を選択する語彙が多く、出現頻度の高さも確認されたからである。

今後の研究課題として、筆者は次の 2 点に興味を持っている。

一つ目は、英語由来の *er* 型男性名詞についてである。結論の 3 点目で指摘したように、この語群は他の語群と比較して【揺れ】に属する語が多いこと、語数の多さと頻度の低さが些か不釣り合いであることから、規範的に不安定であることが予想される。従って、これまで出版された詳解辞典を比較検討し、この語群の数的な推移を見ていく必要があるだろう。

二つ目は、ポーランド語造語論における *-er* の取扱いである。筆者は「2.3. 生産的な *-er* を持つ名詞」において、ポーランド語が独自に造語したと推測される *-er* で終わる名詞 11 語を、本来的な語彙と同等と見なし、考察の対象から外した。しかしながらこれら 11 語の曲用タイプは、いずれも【タイプ II】、すなわち「定着度が比較的低い」と筆者が結論づけたタイプに属している。この矛盾は、これらの名詞の音配列や出現頻度の観点から、再度研究する価値があるだろう。いずれにせよ、*-er* は現代ポーランド語にあってその造語領域を拡大しているように思われる。今のところ筆者は、英語やドイツ語の接尾辞 *-er* が造語法ごとポーランド語に入ってきていると考えているが、この仮説を検証するためにも、改めて詳細な分析が必要となるだろう。

【略記一覧】

de	ドイツ語	it	イタリア語
en	英語	la	ラテン語
es	スペイン語	nl	オランダ語
fr	フランス語	NOM	主格
GEN	生格	pl	ポーランド語
gr	ギリシア語	ru	ロシア語
hu	ハンガリー語	SG	単数

【参考文献、参考資料】

- Bartmińska I., Bartmiński J., 1978, *Nazwiska obce w języku polskim*, Warszawa.
 Grzegorzczkowska R., Puzynina J., 1979, *Słowotwórstwo współczesnego języka polskiego*, Warszawa.
 Kowalik K., 1997, *Struktura morfologiczna współczesnej polszczyzny*, Kraków.
 Nowowiejski B., 2007, *Wpływy języka niemieckiego na polszczyznę w zakresie słownictwa*, *Poradnik Językowy* 5, pp. 14-24.

- Rospond S., 1979, *Gramatyka historyczna języka polskiego*, Warszawa.
- Satkiewicz H., 1969, *Produktywne typy słowotwórcze współczesnego języka polskiego*, Warszawa.
- Sękowska E., 2012, *Neologizmy słowotwórcze we współczesnej polszczyźnie (wybrane zagadnienia)*, *Eslavistica Complutense* 12, pp. 97-103.
- Śliwa D., 1992, *O podobieństwie formalnym polskich i francuskich rzeczowników, Kontakty języka polskiego z innymi językami na tle kontaktów kulturowych*, pp. 59-62.
- 木村彰一, 1985, 『古代教会スラブ語入門』, 白水社
- 貞包和寛, 2011, 『現代ポーランド語における男性人間名詞の複数主格形語尾について』, 東京外国語大学外国語学部 2011 年度卒業論文, 未刊行 (http://www.tufs.ac.jp/insidetufs/kyoumu/doc/yusyu22_sadakane.pdf, accessed: 2013-09-10).

【参考資料】

・ 辞書類

- Duden Deutsches Universäl Wörterbuch*, 1996, Mannheim.
- Greek-English Lexicon*, 1996, Oxford.
- Indeks a tergo do Uniwersalnego słownika języka polskiego*, 2003, Warszawa.
- ISJP: Inny słownik języka polskiego*, 2000, Warszawa.
- Le Grand Robert de la Langue Française* (10^e édition), 2001, Paris.
- Oxford Learner's English Dictionary* (7th edition), 2011, Oxford.
- SEJP: Słownik etymologiczny języka polskiego* (wydanie 2), 1974, Warszawa.
- The New Oxford Dictionary of English*, 1998, Oxford.
- USJP: Uniwersalny słownik języka polskiego*, 2003, Warszawa.
- Wielki słownik poprawnej polszczyzny*, 2010, Warszawa.
- WSEH: Wielki słownik etymologicznohistoryczny języka polskiego*, 2008, Warszawa.
- WSPP: Wielki słownik poprawnej polszczyzny*, 2010, Warszawa.
- WSWO: Wielki słownik wyrazów obcych*, 2010, Warszawa.
- Новейший словарь иностранных слов и выражений*, 2002, Москва.
- 『独和大辞典』(第2版), 1998, 小学館
- 『プログレッシブ仏和辞典』(第2版), 2008, 小学館
- 『羅和辞典』(改訂版), 2009, 研究社
- 『リーダーズ英和辞典』(第2版), 1999, 研究社
- 『ロベール仏和大辞典』, 1998, 小学館
- 『露和辞典』, 1998, 研究社
- #### ・ コーパス
- Korpus Języka Polskiego Wydawnictwa Naukowego PWN* (<http://korpus.pwn.pl/>, accessed: 2013-09-10).

【註】

- ¹ この *-er* が造語フォルマントであるか否かについては、議論の分かれる所である。「2.3. 生産的な *-er* を持つ名詞」で詳述する。
- ² *-er* 終わりの語彙の中には、曲用しない語が幾つかある。例えば *atelier* 「アトリエ」(中性名詞、不変化)、*super* 「素晴らしく」(副詞) など。拙論のテーマは語の曲用にあるので、これらの語は検討対象とはしない。
- ³ 語末が *-er* で終わるフランス語由来の語を辞書で参照すると、対応するフランス語の語末は *-er*, *-eur*, *-ère* などが現れ、いずれも「行為者、道具」を意味する名詞を派生させる接尾辞である。これらのヴァリエーションは全て、ポーランド語では一様に *-er* と受容されている。本稿では、表記の簡便化のため、これら表記上のヴァリエーションを一括して *-er* と示すこととする。
- ⁴ ただし *ber* 「粟」は曲用に際して揺れがある。すなわち *beru/bru* [SG, GEN] の双方が認められる。
- ⁵ 例えば SEJP では *ser* の語源をスラヴ祖語の **syr* に遡るとしている。
- ⁶ 詳しくは *Новейший словарь иностранных слов и выражений* (2002) を参照。
- ⁷ 現に SEJP では、*kosynier* の語源を *kosa* に求めており、「接尾辞が借用である。inżynier を参照」と記述されている (SEJP, p. 259 参照)。
- ⁸ *de. apport* は、動詞 *apporten* 「持って来る」の二人称単数命令法の形態である。この命令の形態が、ポーランド語では男性名詞として受容されていることが USJP の記述から分かる。『独和大辞典』には *Apportierhund* 「獲物を持って来るよう仕込まれた猟犬」が収録されており、ポーランド語の *aporter* もこれに由来する可能性はあるが、ここでは USJP の語源的解釈を優先することとする。
- ⁹ 造語論的には、*pakować* から動詞派生フォルマントの *-ować* を除いた *pak-* に *-er* が付与されたものである。
- ¹⁰ 『ロベール仏和大辞典』をはじめとするフランス語辞典には、*prognose* という語は収録されていない。かつ、*Le Grand Robert de la Langue Française* で引用されている例が 17 世紀の Molière からのみであることを考えると、現代フランス語では既に使用されない語彙であることが予想される。
- ¹¹ 拙論で参照したのは『リーダーズ英和辞典』、*Oxford Learner's English Dictionary*, *The New Oxford Dictionary of English* の 3 冊である。
- ¹² *Duden Deutsches Universal Wörterbuch* でも、ドイツ語の *-er* を生産的な接尾辞として記述している。
- ¹³ 例えば Grzegorzczkowska (1979), Satkiewicz (1969), Kowalik (1997) など。
- ¹⁴ Sękowska (2012).
- ¹⁵ Sękowska (2012), p. 100.
- ¹⁶ USJP では、大文字の *Ulster* は地名を意味し、小文字の *ulster* は生地あるいはコートの一種を意味する、とある。意味 (あるいは表記) の違いに応じて、これらを別の語彙素と考えることもあるいは可能であろうが、本稿において筆者は USJP の見出し語を数えるという原則に従い、これらを同一の語彙素と見なした。
- ¹⁷ ここで言う「非ポーランド姓」とは、例えばドイツ語由来の *Stieber* のようにポーランド

語の人名として定着したものと、ノルウェー語由来の *Bojer* のように定着していないものと双方を含む。

¹⁸ Rospond (1979), pp. 74-75.

¹⁹ ポーランド語の正音法ではそれぞれ [rasel], [bojer] と発音される。

²⁰ 貞包 (2011).

²¹ 語尾 *-owie* は語尾 *-i* と異なり、語幹末の音交替を引き起さない。

O deklinacji „rzeczowników z zakończeniem *-er*” we współczesnej polszczyźnie

Kazuhiro SADAKANE

We współczesnej polszczyźnie istnieje grupa rzeczowników rodzaju męskiego zakończonych na *-er*. Większość tych rzeczowników składa się z zapożyczeń, między innymi z języka angielskiego, niemieckiego, francuskiego i in. Tę grupę można podzielić na dwie podgrupy deklinacyjne.

- I. Rzeczowniki z zakończeniem *-er*, które odmieniają się z zanikiem *e*, jak słowiańska samogłoska ruchoma (w języku polskim pojawia się *e*), np. *magister - magistra*.
- II. Rzeczowniki z zakończeniem *-er*, które odmieniają się bez zaniku *e*, np. *reżyser - reżysera*.

Jak wiadomo, słowiańska samogłoska ruchoma pochodzi z przedpolskiej wokalizacji jeru. Jednak jak już autor zwrócił uwagę, większość „rzeczowników z zakończeniem *-er*” jest obcego pochodzenia. Z jakiego powodu niesłowiańska samogłoska *e* zachowuje się tak, jak właściwa słowiańska? Szukając odpowiedzi na to pytanie, odwołajmy się do ustaleń Rosponda i Bartmińskich. Według nich nazwiska obce zakończone na *-er* można podzielić na dwie grupy:

- I. Nazwiska, które odmieniają się z zanikiem *e*, np. *Luter - Lutra*. Takie nazwiska są spolszczone.
- II. Nazwiska, które odmieniają się bez zaniku *e*, np. *Schiller - Schillera*. Takie nazwiska natomiast nie są wystarczająco spolszczone.

Zdaniem autora podobne podziały także stosować można do „rzeczowników z zakończeniem *-er*”, ponieważ grupa ta składa się głównie z rzeczowników obcego (niesłowiańskiego) pochodzenia, jak nazwiska *Luter* albo *Schiller*. Na podstawie tych informacji autor postawił tezę: jeżeli dany zapożyczony leksem w całym paradygmacie nie utrzymuje jednolitej postaci tematu, to posiada on silniejszy charakter jako leksem spolszczony, tak widzimy odmianę leksemu *magister - magistra*.

W tym artykule autor sprawdził tę tezę z punktu widzenia etymologii, typów deklinacji i częstotliwości w *Korpusie języka polskiego wydawnictwa naukowego PWN-u*. Z analiz wynika, że:

1. w grupie zapożyczeń z języka niemieckiego znajdować można więcej spolszczonych leksemów, niż w grupach zapożyczeń z angielskiego, francuskiego i in.
2. statystyczna analiza korpusu pozwala stwierdzić, że frekwencja pochodzących z niemieckiego i francuskiego „rzeczowników z zakończeniem *-er*” jest wysoka.

3. pochodzące z angielskiego „rzeczowniki z zakończeniem *-er*” zajmują pierwsze miejsce, jeśli chodzi o liczbę leksemów (199, a z francuskiego - 164, z niemieckiego - 148). Jednak ich częstotliwość zostaje na bardzo niskim poziomie.

Wyniki tych analiz statystycznych częściowo potwierdzają tezę postawioną przez autora, ponieważ niemieckie i francuskie „rzeczowniki z zakończeniem *-er*”, które odmieniają się z zanikiem *e* (tzn. silniej spolszczone) mają większą frekwencję w korpusie.